



令和4年度

鹿児島県の教育

2・3月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部長

薩摩川内市立川内中央中学校長
池田 猛

「魅力ある学校」を目指して

学校が一年の中の充実期を迎えようとしている十月半ばから、コロナ感染状況も少し落ち着きを取り戻したかに見えたが、わずか三週間あまりで、次の波がインフルエンザとともに押し寄せると考えれば、再び緊張した学校経営をこれから年度末まで強いられそうである。感染防止対策もそうであるが、校長は様々な課題と向き合いながら、課題解決に向けて日々業務を遂行していかなければならない。

先日、「文部科学省の調査によると令和三年度の全国の不登校児童生徒数が二十四万四千九百四十人(前年度十九万六千二百二十七人)で、これは、児童生徒千人当たりの不登校児童生徒数に換算すると二十五・七人であり、過去最多となった。」との報道があった。この数字を見ると、不登校児童生徒の解消は、県内に限らず、全国どの学校でも抱える大きな課題である。

そこで、私が勤務している薩摩川内市では、今年度から不登校児童生徒の解消を念頭に、「魅力ある学校づくり」をスタートさせた。不登校の要因も「無気力・不安」「友人関係」「進学、進級への不適応」「生活リズムの乱れ」「家庭環境」等様々であり、その対応には苦慮している。まずは新たな不登校を出さない取組として、市内各学校で、児童生徒一人一

人が、自己有用感を高められるよう取り組んでいる。また、学期ごとに、「学校が楽しい」「みんなで何かをするのが楽しい」「授業に主体的に取り組んでいる」「授業がよくわかる」の四点を全児童生徒にアンケートを取り、その結果を各学校で分析し、次学期に生かしている。

本校でも、学年ごとに結果を分析したが、どの学年も「主体的に授業に取り組んでいる」の項目が低く、それぞれ教師が「二学期、私にできること」を決め、その決意を中心に授業を展開していた。このような取組は早々に結果として表れるものではないが、子どもたちが授業を「主体的に取り組む」、それが「授業が楽しい」につながり、「学校に行くのが楽しみ」と段階的に発展して行くことを願うばかりである。

また、本校区の学校運営協議会で、各委員に「魅力ある教職員」について意見を求めた。「子どもたちと正面から向き合ってくれ」「何でも相談できる」等、ほとんどの委員が子どもと教職員の信頼関係を語ってくれた。授業が楽しく、教師が子どもたちに寄り添いながら教育活動を進めることが、子どもたちにとっての「魅力ある学校」だと信じて取り組んで行きたい。

令和5(2023)年 2・3月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

| | | | |
|----------|----|--------|----|
| 巻頭言 | 1 | 話のひろば | 13 |
| 随想 | 2 | 読書案内 | 15 |
| 提言 | 3 | 趣味・文芸 | 17 |
| わが校の学校経営 | 5 | 郷土の紹介 | 18 |
| 子どもが輝く教育 | 7 | 専門部だより | 19 |
| 心に残るひとこと | 9 | 編集後記 | 20 |
| ある日の校長講話 | 11 | | |



演じるということ

(株)ニライスタジオ代表取締役 松永太郎
演出家

鹿児島のような地域の歴史をミュージカルにしていますが、各地で出あう子どもたちに「演劇好きな人？」と尋ねると、まずほとんど手が上がりません。ほんの一部、ごく稀に存在する演技好きな子以外は、生徒も先生も「演劇って苦手」というのが正直な気持ちでしょう。だけど皆さんも普段の暮らしの中で、様々な自分を演じているのではないのでしょうか。家族の中でお父さんとして振る舞う、仕事場では上司として、趣味の先輩に呼ばれた飲み会等々、どの場面でも全く同じ言葉、表情の人はいないでしょう。人間は相手によって演じる存在なのです。

では、役者にとって演技の上達とは何か。滑舌よくスラスラとセリフが出てくる。それっぽい息づかいや表情を添えて。なんていうのは、実はごく最初のステップです。笑顔を作るには口角をこう上げて・・・みたいなことは身体をコントロールする技術。しかし、観客というのは、表面に現れた様子と心の中で思っていることの違いを簡単に見抜いてしまいます。それは私たちが普段から演じる存在だからなのかもしれません。役者が目指すのは、演じながらも、本当に役の人物になりきることで。演じている瞬間、その人として真剣に生きるとても言いまし

ようか。どうやったら役に「見える」かではなく、もっと心の奥底の部分でその人物として生きることなんです。いや、そうは言っても台本があり演出があるのが演劇ではないかと思われることでしょう。そう、演劇は物語という虚構の上になり立つものです。役者は台本を読み込み、セリフや動きを何度も何度も練習するので。それが虚構の世界と分かっている。

私が指導する時によく言う言葉があります。右肩に冷静な自分、左肩に燃える自分。この二人を常に乗せておこうと。冷静な自分は学び、覚え、考える自分です。特に稽古の時に大事で、相手との息を合わせたり、演出に則った立ち位置に移動したりと、自分の身体を物語の中でコントロールします。では、燃える自分とは。これは本番の時に大事な感じる部分です。お客さんや共演者の空気を感じる。そして、感じとったことに反応すること。それは言いかえれば自分という役者の野生を解き放つと言ってもいいでしょう。この二つの自分を高い次元で両立させることが、役者の仕事だと思っています。練習ではしっかりと準備し、身体に染みこませること。本番ではやってきたことを信じ、自分を解き放つこと。本格的な舞台ではなくても、

略歴

一九九七年 筑波大学大学院修了
二〇〇八年 高校生ミュージカル「ヒメとヒコ」がスタート。
二〇一五年 第三〇回国民文化祭がこししま
二〇一五にて総合開閉会式を演出。

日常でのちよつとしたスピーチなどで応用できるのではないのでしょうか。

スマホやSNSの普及により、公園で「っこ遊び」をする子どもたちを見なくなりました。若者が本気でケンカをするシーンも少なくなった気がします。自身の生活では当たり障りなく過ごし、バーチャルな世界では別人のように攻撃もできる。そんな時代に、演劇はとてつもなくアナログな人間のぶつかり合いを体験できる場所だと思っています。人はみな一回限りの人生の物語を生きていますが、演劇をするということは、自分とは全く違う人として考え行動する、別の人生を体験することなのです。色とりどりの物語を演じることで、自分の人生で壁にぶつかった時、「あの人物ならどうするだろう」と、客観的に自分を見つめ直すことができるかもしれません。もしくは人間関係で苦しんだ時に、「シーン二・友だちとケンカした夜」なんて心の中でつぶやいてみてください。少し気が楽になるかも知れません。そして、どうこの壁を乗り越えようかという力が湧いてくるのではないのでしょうか。多くの子どもたちがこの有意義な演劇体験を楽しめる環境になればと心から願っています。



ムダがないかを考え、

業務改善の推進を

三船小(始伊) 川原典明

年々、鹿児島県教員採用試験の最終倍率は下がり、今年は小学校で三倍程度であった。教職員の魅力を高め、志ある優秀な人が活躍し続けるための環境づくりが急務となっている。しかし、業務改善について様々な試行錯誤と会議を重ねているが、学校教育に求められている課題は山積しており、教員の残業時間の減少に結び付いていないのが現状である。平成七年四月に出された中央教育審議会の第一次答申の中で学校のスリム化が提唱され、平成一八年一二月に成立・公布された新しい教育基本法において、保護者が子どもの教育について第一義的責任を有することや、学校・家庭・地域住民その他の関係者が、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚し、相互に連携協力を努めるべきことなどが新たに規定された。

ここで、学校は家庭や地域にこれまで抱えていた教育の一部を返還し、負担軽減が図られるものと期待したが、現状はどうであろうか。コロナ対応、共働き家庭の増加による家庭教育力の低下や貧困による教育格差、クレーム対応、不登校児童の増加、外国語科に伴う指導時数の増加、タブレットの普及に伴う指導技術

の変化など、学校に求められる課題は反対に増加していると感じられる。

このような現実の中で、多くの教員が教師としての使命感・職責感の中で残業時間を縮減していかなければならないという課題に葛藤を抱えながら教材研究と宿題等の添削に多大な時間を割いているのが現状である。

本校で行った残業時間を行う業務アンケートでは、宿題等の添削など学級に起因するものと、職員向けの文書作成など校務分掌に起因するものが上位を占めていた。また、要望としては「会議の短縮」「情報機器の利便性」が多数を占めている。

では、どのようにして勤務時間内に職務を終えることができるのか、「会議の短縮」にはどう取り組めばよいのか。ここで「トヨタ物語」の著者である野地 秩嘉氏の「事務職にひそむ七つのムダ」を参考に考えてみたい。

トヨタの会議はじっくりと時間をかけて話し合う会議もあれば極めて短時間で終了するものもある。短時間で終了するのは「単なる情報の共有」の場合である。会議に参加する前に必ずテーマを確認して臨むようにすることで、ムダ

な説明を省き、要点に絞って会議が進められる。特徴的なのは、トヨタでは会議の準備から内容、用意された資料まで、すべてに改善の視点で指導が入っていることである。時間を単に短くすることよりも、中身を改善して、結果として時間が短縮されることが重要であり、学校でも、事前に資料を配布して、単なる連絡事項は各自が確認し簡潔な説明で終わるようにして、問題点の議論に集中して時間が取れる効率的な会議へとつなげる改善が必要である。

また、トヨタでは「七つのムダ」を出さない取組が徹底されている。

その中でも「動作のムダ」は参考になるのではないだろうか。「情報機器の利便性」を高め、少しでも教室の中で、机の周りで事務が完結する環境を整えることで、「動作のムダ」を省く工夫・努力を行う。その結果として、効率的に事務を遂行することができる。昨今、どの学校でも取り組まれている校内LANにおけるデータの蓄積と共有化、校務支援ソフトの有効活用などである。

そして何より職員全体の意識改革である。

ベテランの教師やICTに堪能な職員を業務改善指導担当に置き、校内で業務を効率化させる文化を構築していくことも一つの手段である。

日本人は勤勉と言われるが、残業することを是と捉えるのではなく、今こそ業務のムダを職員一人一人が考え、見つけ出し、効率よく業務が進められる環境を整えていきたい。



特別活動の充実で期待できること

第一佐多中学校(隅) 小田 敬介

一 はじめに

二〇〇六年に経済産業省が、職場や地域で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力(三つの要素・十二の能力要素)」として定義している。それを見たときに、将来社会を担っていく貴重な人財として、子どもたちに身に付けさせたい力であると考えた。教科の授業はもちろんであるが、特別活動を通して、身に付けられる力も大きいように感じた。そこで、社会人基礎力の育成に特別活動がどのように役立つかについて考えてみることにした。

二 社会人基礎力とは

社会人基礎力は、三つの要素と十二の能力要素で定義されている。

(一) 前に踏み出す力(アクション)

一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力。能力要素は、主体性(物事に進んで取り組む力)、働きかけ力(他人に働きかけ巻き込む力)、実行力(目的を設定し、確実に行動する力)。指示待ちにならず、一人称で物事を捉え、自ら行動できるようにすることが求められる。

(二) 考え抜く力(シンキング)

疑問を持ち、考え抜く力。能力要素は、課題発見力(現状を分析し、目的や課題を明らかにする力)、計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力)、創造力(新しい価値を生み出す力)。論理的に答えを出す以上に、自ら課題提起し、解決のためのシナリオを描く、自律的な思考力が求められる。

(三) チームで働く力(チームワーク)

多様な人々とともに、目標に向けて協力する力。能力要素は、発信力(自分の意見を分かりやすく伝える力)、傾聴力(相手の意見を丁寧に聴く力)、柔軟性(意見の違いや立場の違いを理解する力)、状況把握力(自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)、規律性(社会のルールや人との約束を守る力)、ストレスコントロール力(ストレスに対応する力)。グループ内の協調性だけに留まらず、多様な人々との繋がりや協働を生み出す力が求められる。

三 特別活動の中でどう育てるか

三つの要素を、学級活動、学校行事、生徒

会活動を通して、どのように育てていくかを考えてみた。

(一) 学級活動で

学級活動は、学級や学校の生活上の様々な問題を話し合って解決することや、級友と協働して取り組む活動を通して、考え抜く力の課題発見力と計画力の育成につながる(例えば、よりよい学級にするために、課題を見付け、解決のための計画を立てるなど)。

(二) 生徒会活動で

生徒会活動は、異年齢の生徒同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立てて役割を分担し、協力して運営することを通して、チームで働く力の発信力や傾聴力、柔軟性の育成につながる(例えば、生徒総会や体育大会、文化祭に向けて生徒会役員が各学年・学級との連絡・調整をしたり、運営したりするなど)。

(三) 学校行事で

学校行事は、全校又は学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くため体験的な活動を通して、前に踏み出す力の実行力や考え抜く力の計画力、チームで働く力の状況把握力、規律性の育成につながる(例えば、体育大会や文化祭の取組を通して)。

四 最後に

学力の向上に向けた授業改善は、どの校種も積極的に行っている。その土台となるのは、学級・学校の生活環境である。特別活動についても、積極的な取組の必要性を感じる。



自然や文化、伝統を大切に

「知・徳・体」調和のとれた児童生徒の育成を目指して

伊子茂小中(大) 福元 親 視

一 はじめに

本校は、加計呂麻島の中央に位置し、波静かな伊子茂湾の奥にある。校区全体が美しい山々とリアス海岸の海に囲まれている。

小学校の校区は、花富・伊子茂・於齊・勢里・押角の五つの集落からなる。現在は俵小の休校に伴い、瀬相・俵・須子茂集落からも児童が通っている。中学校は、俵中と薩川中の休校に伴い、加計呂麻島の西側三分の二ほどの広大な校区となり、俵・西阿室・薩川集落からも生徒が通っている。そのため、スクールバスが運行している。

地域住民は学校の教育活動にたいへん協力的であり、多くの世帯がPTAの準会員となっている。

現在、児童生徒は二十八名であり、十一人が、瀬戸内町による「にほんの里・加計呂麻留学制度」を活用し在籍している。

二 学校経営の基本方針

学校教育目標は、「創造性と意欲に富み、心身共に健全で明るくたくましい伊子茂の子どもを育てる」である。離島へき地・小規模校の特色を生かし、「知・徳・体」の調和の

三 特色ある教育活動

(一) 郷土教育の充実

ア 伊子茂湾横断遠泳大会(七月)

昭和四十四年度から学校行事として位置づけ、行っている。地域の高齢者の話によると、集落行事として、それ以前からあったようである。本校の水泳学習は、学校近くの海岸で行う。五月下旬からの水泳学習発表の場として実施している。伊子茂から隣集落の浜まで約一キロメートルを泳ぐ。安全面を考慮し、児童生徒一人につき大人の伴泳者が一人、救護艇としてカヤックや小型船を依頼する。地域や保護者の協力がなければ実施できない行事である。当日は、多くの方が声援やチヂン太鼓等で応援をしている。

イ 地域文化の伝承

運動会の種目に「八月踊り」と「六調」を取り入れ披露している。運動会では、

(二) 小中連携

ア 校内研修

児童生徒の「主体的・対話的な深い学び」を目指した指導法の研究をテーマに掲げ、研究授業を中心に研究を深めている。小中それぞれ授業を提供し互いの立場や小中九年間を見通した意見交換を行っている。特に、本年度はICT機器の活用等について小中連携した取組を行っている。

イ 協同活動

中学生(生徒会)が中心となり、全児童生徒で活動している。

○ 縦割り班による清掃活動

○ 体育的行事(運動会や持久走大会)

○ 地域清掃ボランティア活動(年二回)

四 おわりに

本校では、遠泳大会や島口劇など自然と文化にふれあう活動が、伝統として引き継がれている。一方、時代の要請とともに教育活動も多様化し、その一つ一つに対応しながら学校経営を進めている。

これからも離島へき地・小規模校並びに小中併設校として、その利や特色を生かし、伝統を守り、「知・徳・体」の調和のとれた児童生徒の育成を目指していく。



新時代の学びを支える

教育環境を目指して

牧之原養護学校 鶴田弘文

一 はじめに

本校は、県下一周駅伝四日目で最大の難所と呼ばれる亀割峠を上がり、県立学校で最も高い標高約三百八十五mの高台にある特別支援学校である。昭和五十四年に小・中学部生八十九人と三十人の職員で開校してから四十四年目を迎えた現在は、三百五十七人の児童生徒が在籍し、職員数は百五十三人である。

県内では、特別支援学校に通う児童生徒の増加及び通学バスによる通学時間や特別支援学校設置基準への対応など特別支援学校等の教育環境改善検討委員会で調査・検討が行われているが、始良市、霧島市、曾於市、志布志市、鹿屋市（旧輝北町）を通学区域とする本校の教育環境整備も大きな課題である。

二 学校経営の方針

障害のある児童生徒を取り巻く環境や施策が、大きく転換し加速化する中でも、特別支援教育が、児童生徒一人一人を出発点にした『あつらえの教育』であることは変わらない。来年度から学校名が牧之原特別支援学校となる本校のキャッチフレーズ『子供たち一人一人の夢や希望の実現に向けて』すべては子

供たちの幸せのために』も本校教育活動における不変のテーマである。

本校の校長二年目にあたり、学校経営の中期的目標を次の四項目とした。

- (一) 安心・安全な教育環境づくり
- (二) 教育的ニーズに応じた指導の充実
- (三) 将来を見据えたキャリア教育の充実
- (四) 家庭・地域との積極的な連携

三 「教育環境づくり」のための取組

安心・安全な教育環境の整備及び校内体制の充実に向けて、以下の方策を掲げた。

- (一) 疾病・感染症の防止及び学校事故の未然防止のための環境整備
- (二) 安全管理の徹底
- (三) 児童生徒及び職員の健康管理
- (四) 人権を尊重し、児童生徒の心に届く指導の充実

四 環境整備の主な取組

- (一) 安心・安全な教育環境整備
 - 高台に位置する牧之原は霧の発生が多く、学校前の国道はトラック等の交通量も多い。このため、通学バス十台に加えて放課後等デイサービス事業所の送迎車数十台

が出入りする登下校時の安全確保は喫緊の課題であった。そこで、関係課に状況を相談し学校への進入路の拡幅工事が始まった。不足する駐車場や作業学習用の農園の移転と併せて来年度まで整備工事が続く予定である。



(二) 情報化による働きやすい職場環境づくり

管理職の打合せや主事等会は、情報端末のデジタルノートアプリ(OneNote)上で参加者全員からの情報を確認し、意見やアイデア等の手書きメモを共有するようになった。(写真左)

クラウド上のデータ共有は、新型コロナウイルス感染症防止のために自宅待機となった場合も、自宅から会議に参加し、内容の確認・加筆修正することも可能で、コロナ禍での働き方改革にもつながった。(写真右)



五 おわりに

本校創立五十年目となる令和十年年度の児童生徒数は四百名を超えると予想される。来年度から牧之原特別支援学校となる本校児童生徒の学びの場として、教職員の職場として必要な環境整備に今後も努めていきたい。



五感が響く感性豊かな子の創造

九玉小(南) 林 裕一郎

一 はじめに

明治九年創立の本校は、長い歴史を受け継ぐとともに、昭和二十八年築の古い校舎で親子三代の学びが続いている。校庭からは東に開聞、矢筈、大野岳を望み、南には三島や屋久島を望む東シナ海が広がり、一帯は県立自然公園「薩南海岸」に指定された景勝地である。また、本校区は農村地帯であり、市文化財「田の神」があることから、江戸時代から稲作が盛んだったことが分かる。本校児童は、この伝統を引継ぎ、地域協力の下「御領どろんこ米」を作り、豊かな自然とともに地域のよさを実感している。今年度児童数は五十七人、特別支援学級二学級を含む全六学級、うち中・高学年は複式学級の小規模校である。

二 子どもの日常の姿から感性を感じる

子どもの感性は、学校や家庭、地域で育てるものと考えており、本校教育でも常に意識し活動している。以前、雪国育ちと南国育ちで感じる「白」と「黒」のイメージは大きく違うという結果を見たことがある。雪国育ちの多くは「白」は冷たく「黒」は暖かいというイメージを持つそうだ。理由は、白はもろい雪の色。黒は雪解けて現れた地面の色か

ら暖かい春をイメージする。鹿児島育ちの子にこの想像は難しい。感性は、育った環境とともに見たり聞いたりしたときに「美しいね」「きれいだね」「すてきだね」の声掛けで大きく育つ。そこで、本校児童のすばらしい感性に気付いた出来事を紹介する。

(一) タオルの落とし物

天気の良い昼休み、校庭の片隅に一枚のタオルが落ちていた。五十七人の子どものうちの誰かが落としたものであろう。周りで遊んでいる子らに「これだれのか分かる。」と尋ねた。子どもたちは、まずタオルを取って目で眺めた。そして次の瞬間、タオルを顔に近づけ臭いを嗅ぎ「これは○さんのだよ。」と教えてくれた。子どもは、日頃から五感を駆使して様々な経験をしている。大人が忘れかけていた五感を研ぎ澄ませ、感性豊かな人間に育ってほしいと願う。

(二) 蜥蜴の尻尾

チヨロチヨロと一匹のトカゲが校長室前の窓枠を走り抜けた。よく見るとシツポが切れている。トカゲには気の毒だが、トカゲが遭遇した出来事を想像できた。春の陽

気の中、二年生が担任とともに校長室前の草っ原で野の花探しをしていた。「たんぼぼだ。」「引き抜かないでやさしく見てね。」等、教児一体の姿が見られた。そんななか、トカゲに果敢に手を出した子がいたのだらう。微笑ましい光景が浮かんだ。前任地の美術館は、虫歯対策のため動植物持込み禁止の場所であった。美しい花の絵はあるが、生物は皆無の場所である。本物の自然と触れ合える教育ができる学校がうれしい。

(三) 校長室の花

ある三学期の昼休み、数人の子らが校長室に遊びにやって来た。今から来客があると伝えると、どこかに走り去った。しばらくして、この子らは野に咲く花を摘んできて、校長室にある木皿に見栄え良く並べ、来客のおもてなし準備に取り掛かった。甘い香りが部屋中に漂い、来客到着を楽しみに待つこととなった。もちろん来客には、この花のことを話した。一年を振り返り、心豊かな子の成長を見届けることができた。

三 おわりに

先日、ある児童美術展の講評を読んだ。そこには、「もっと五感で味わう体験も積極的に取り入れて」と書かれていた。これからの時代を生き抜くためには「自らつくっていく力」を育む教育としてSTEAM教育の推進が掲げられている。この中の「A」を意識した教育の可能性に更に取り組んでいきたい。



米作りの昔と今を体験

泰野小(隅) 村田 富秀

一 はじめに

本校は、学級数六学級(特別支援学級一学級を含む)、児童数四十九名の小規模校である。本年度、創立百四十九周年を迎えた。志布志市北西部の山間部に位置し、周りは野山で囲まれ、校区には田畑が広がる。この恵まれた自然を生かした特色ある教育活動の一つとして、五・六年生が総合的な学習の時間に米作り体験活動に取り組んでいる。

二 米作り体験活動の概要

(一) 活動のねらいと工夫

米作り体験活動のねらいは、「身近な環境と生命のつながりに目を向けさせ、生命あるものを大事にする態度や自然の恵みに対する感謝の心を育てる」である。

「植えてから食すまで」をテーマに掲げ、田植えから餅つきまでの一連の活動を行っている。活動の工夫として、昔ながらの手作業だけでなく、機械を使った作業も取り入れている。そこには、機械を使って楽しく活動を行うことで、農業に興味をもってほしいという地域の方々の願いがある。

(二) 活動の実際

六月に行う田植えでは、まず、手植えを体験する。田んぼに足を踏み入れたときの泥の感触も子どもたちにとっては楽しい体験となる。次に、田植え機による作業を体験してみる。自分で運転することはできないので、運転してくださる地域の方と一緒に田植え機に乗る。座っているだけであるが、子どもたちはとても喜んでいる。

十月に行う稲刈りでは、まず、鎌で刈り取る作業を体験する。最初の内はおそろおそろだった子どもも、慣れてくると、すいすいと刈り取っていくようになる。稲を束ねる作業は、ひもで結ぶのがなかなか難しいようであった。その後、バインダー(稲刈り機)を使った作業を体験してみる。田植え機と違って子どもでも操作ができるので、実際に一人一人操作してみる。中には操作が難しいと感じている子どももいるが、大方の子どもが楽しんでる。

十一月に行う脱穀では、足踏み脱穀機とハーベスタ(動力脱穀機)の両方を体験し

てみる。足踏み脱穀機は、一人では踏み板が重いのか、三人がかりで力を合わせてやっている子どもたちもいた。十二月には餅つきを行い、おいしくいただいて、一連の活動が完結となる。

(三) 子どもたちの感想

稲刈り後に子どもたちが書いた主な感想は次のとおりである。

- 鎌を使った手刈りでは、昔の人たちの大変さや農業の大変さ、難しさがよく分かりました。機械は楽で楽しかったです。
- 手で刈るのはとても大変だったけど、機械でやると楽だったので、やっぱり昔の人は大変だったんだなと思いました。
- 機械は束ねる作業まで同時にやってくれるので、とても助かりました。

これらの感想から、手作業と機械の両方を体験したことで、昔の人の苦労と機械のよさをより実感できたことが分かる。

三 おわりに

自然の恵みに対する感謝の心を育てるだけでなく、手作業の体験だけでも十分である。しかし、社会科の農業の学習との関連を考えたとき、手作業と同時に機械化のよさも体験させることは大いに価値がある。そのことが協力してくださる地域の方々の願いでもある。手作業と機械の両方を体験できる本校の米作り体験活動は、子どもたちにとって様々な価値のある貴重な体験となっている。

心に残るひまわり



運動会と卒業式が立派に・・・

東谷山小(市) 鶴

潔

「心に残るひとこと」の原稿を書くのもこれで三度目である。新記録だろうか。

さて、本題に入ろう。十月末に八百名を超す全校児童での、運動会を三年振りに開催した。日曜日の午前中開催、家族は二名までの参加と制限はあったが、練習時から子どもは、やる気に満ちていた。運動会当日は、すべての子どもが笑顔に満ちていた。その姿を見ながら「学校行事は、学校生活の節目であり、運動会と卒業式が立派にできれば、まあ、いい学校だ。」と新採の時の先輩の言葉を思い出した。

なぜ卒業式と運動会なのかを尋ねたところ、どちらも学校の総力をもって取り組むものであ

り、動的行事と静的行事の代表が、この二つであり、他の行事とは格が違うのだと教えていただいた。

そして、運動会の練習から本番までの子どもを見ているうちに、全校で行う行事の価値を改めて強く感じた。その価値は、今の学年での力を出し切ることはもとより、下学年を見て自分の成長を実感できること。さらに、上学年に将来の自分の姿を重ねて思い描くことができるということである。今の自分を知り、自分の成長を実感し、将来の自分の姿を確認できるということである。このことがあるから、学校行事が学校生活の節目になり得ると思う。本校の児童は自己有用感が低いという実態からも、一人一人の力を集団の中で発揮する学校行事は大切なものである。

さらに、今回の運動会を通して行事の重要性を全職員で共有できたことも大変うれしいことであった。

コロナ禍ではあるが、今後も全職員で知恵を出し合い、教育活動を充実させ、二年間で失ってきたものを少しでも取り戻せるよう努力したい。校長として、今年の運動会はある程度満足できるものがあったと思う。

そして、卒業式こそは、通常の形で「立派な卒業式でした。」と参加者全員が満足することを願うばかりである。

六然訓

土橋小(鹿) 和田 義文

Y町でお世話になったY教育長先生が退任される際に、ご自分が常に意識しながらことなれたらっていたという座右の銘を紹介してくださった。それが、「六然訓」である。残念ながら退任あいさつの中だったので詳しくお話を聞くことはできなかつたが、どんなことなのかを帰ってすぐに調べてみた。

自處超然 じしよちようぜん

處人藹然 しょじんあいぜん

有事斬然 ゆうじざんぜん

無事澄然 ぶじちようぜん

得意澹然 とくいたんぜん

失意泰然 しつたいぜん

中国明の時代の古典の漢詩で、幕末の勝海舟たちもこれを深く学んだらしい。読みだけでも難しいが、その意味するものはとてつもなく深く、理解するのも時間も要した。六つの場面で、このような生き方ができたらよいとする、人としての理想の生き方を表現している。解釈の仕方は、人それぞれであるようである。

それらを読み返していくと、今の自分に一番必要なものとし教訓にしたいのが、六番目の「失意泰然」かもしれない。この四字には、「失意

の時にはうろたえ、呆然となるのが人間の常だが、だからこそ逆に泰然と構え、大所高所から眺めてみる必要がある。するとそれまでは見えていなかったことに気づき、窮地を脱することができる。そこで意気消沈することなく、失意の時こそ誠実にこつこつと、やるべきことを今の自分でできることを最大限に実行していくことが大切である。そうすると、結果は後からついてくる。」の意味がある。

校長として高い壁に何度もぶち当たり何度も跳ね返されているが、落ち込んでいただけでは先は見えてこない。できることを少しずつでも積み重ね、誠実に事にあたっていくことが大切だと教えていただいた気がする。貴重な言葉をいただいたY先生に感謝申し上げたい。今後、その他の五つの四字についても深く読み取っていきいたいと考えている。

背中を押してくれた言葉

寿小(隅) 小野 武 利

これまでの教員人生を振り返ると、様々な面
で多くの人に支えられ、助けられてきた。特に、

教員人生の転機となる場面で、その折々に言葉をくださる先生方と出会えたことに感謝している。

前職は、行政職であった。赴任する前は、教頭を三校経験していたこともあり、初めての行政職ではあるが、何とかなるだろうと安易に考えていた。しかし、そんな甘い考えは勤務一日目で吹き飛んだ。今、振り返ってみても最初の「か月の記憶がほとんど残っていない。「これでいいのか。」と不安を抱えながら、何とか業務をこなすのが精一杯で、何度も心が折れそうになった。「自分には行政職は向いていない」と、自信もなくしかけていた。そんな自分を救い、前向きな気持ちにしてくれたのが、教育長の二つの言葉であった。

一つは、教育長が校長研修会の際に紹介された「置かれた場所で咲きなさい」であった。この言葉で、「分らない。」「できない。」「ではなく、「この場所に来たことには意味がある。自分にできる精一杯の仕事をしよう。」と考え直すことができた。もう一つは、「ファーストベインギンが必要」という言葉である。当時、GIGAスクール構想を受け、教委として様々な判断を迫られていた。他の市町の動向を気にか
け、なかなか判断が下せないでいた時に、教育長が口にした言葉であった。ドンと背中を押された気がした。「他の市町がどうこうではなく、

我々が子供たちのために、先生方のために何ができるか。」「挑戦を恐れない。」と考えを改めることができた。その後は、教育長の指示を受けながらできることに着実に取り組むことができた。

本校に赴任したことも何かしら意味があると考えている。これまでいただいた言葉を胸に、子供たち、地域のために挑戦を恐れずに、自
なりに精一杯尽力したい。

先生の言葉で教師になりました

下平川小(大) 林 賢 介

「先生の言葉で、私は教師になりました。」この言葉は、新採で勤務した学校で、担任したことはなかったが、スポーツ少年団や陸上記録会の指導でかわった教え子からの言葉だ。

新採は、離島の一学年一学級で、児童数七十人ほどの小規模校だった。大学を卒業して数日後には、子どもたちや保護者から「先生」「先生」と呼ばれ、うれしかったり恥ずかしかったりしていたことを思い出す。教材研究が不十分で、授業の流し方も先輩方のようにうまくい

かず、当時の子どもたちには申し訳なかつたと反省している。

その学校に、県本土から転入生の兄・妹がやってきました。確か、兄は六年生、妹は四年生での転入だったと記憶している。兄とは一年間だったが、妹とは三年間、同じ時間を過ごした。負けず嫌いの性格で、勉強も運動もとにかく頑張っていた。その子は、バレーボール少年団に所属していたが、同じ学年には、さらに運動神経のいい子がいて、なかなかその子には勝てなかつた。ある日、その子が体育館の陰で泣いていた。理由を尋ねると、「○○さんにどうしても勝てなくて、悔しいんです。」と答えた。私は、「その悔しい気持ちがあれば、もっと上手になる。諦めないで頑張れ。」と励まし、「選手としてだけでなく、指導者の道もあるよ。先生になつて、子どもたちに教えたら。」と声を掛けた。その後異動になり、その子のことも忘れていたが、十六年後の異動先にいきなり訪ねてきて、冒頭の言葉を言ってくれた。高校の教師になった彼女は、当時のことを楽しそうに話してくれた。忘れていたことを申し訳なく思うとともに、その子の将来（人生）を左右する言葉だったのだと感じた。教師生活も残り少なくなってきたが、もう一度「先生の言葉で○○になりました」という言葉を聞きたいと思う。

ある日の校長講話



八幡幼稚園・八幡小学校合同運動会

八幡小(熊) 濱 元 弘

コロナ禍、予測困難な状況で、学校だけでなく、PTAや地域の方々とお互いに考えを聴き合い協力し、新しい運動会を創ってきました。前例のない取組は、これからも続きます。このようなチャレンジは、きっと、子どもたちがこれからの時代をよりよく生きていくための礎となることでしょう。

さあ、八幡幼稚園、八幡小学校の皆さん！皆さんの周りにいる方々は、どのような想いをもつて、この会場にいられていると思いますか。

あなたたち一人一人を見るために来られているのです。走ったり踊ったりする姿だけでなく、

競技を待っている姿も。もちろんこの瞬間も。立っている姿も見えています。会場の方々は、あなたたちを見たいから、応援したいからこの会場に来られています。あなたたちが一生懸命楽しんで取り組む姿で、あなたたちの熱い想いを伝えてほしいと思います。この会場にいるみんなを幸せに、元気にする力があなたたちにはあるのです。

もしも、うまくいかないことがあっても心配いりません。校長先生を始め、先生方や会場の方々は、あなたたちが一生懸命練習してきたことをわかっていますから大丈夫です。

中学生、青年団の皆さん。皆さんが大会役員として協力する姿、競技に参加する姿は、子どもたちの目標、憧れとして、しっかりと心に焼き付くことでしょう。

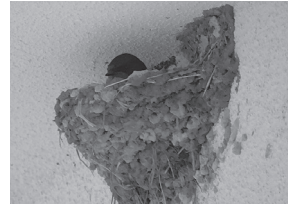
幼稚園、小学校、中学校の子どもたち、青年団の皆さんが集まり、躍動する合同運動会。ここ八幡ならではの、オンリーワンの運動会だと考えています。

この運動会は、可能な限り子どもたちの学びを保障し、この時代に前向きに取り組む運動会です。皆様と共に、この合同運動会を成功させましょう。

「ツバメの巣立ち」

和田中(市)吉永直昭

体育館への渡り廊下の真ん中あたりに、ツバメの巣があるのを知っていますか。昨日は、お母さんツバメが卵を温めていました。



ツバメは、巣作りからヒナの巣立ちまで、オスとメスが共同で子育てをするそうです。巣作りに一週間ほどかかるそうですから、きつと六月の中旬くらいから作り始めたんですね。卵は主にメスが辛抱強く温めます。その間、オスは巢の近くで外敵から巣や卵を見張って警戒しているそうです。よく飛び回っているのは巣や卵を守っていたんですね。卵からヒナが孵るまで二週間ほどかかるので、七月にはヒナが餌をもらう様子が見られるかもしれません。生まれたてのヒナは裸ん坊なので、体が冷えないように親鳥が羽毛の中に包み込んで温めてくれるそうです。また、ヒナのフンは、親がすぐにクチバシでくわえ外に持ち出し、ダニや寄生虫がつかないように常に巣を清潔にするそうです。これから巣の下にフンが落ちてくると思いますが、親の愛

だと思って大目に見てください。順調に育てば、終業式の頃には、巣立ちを迎えられるはずですが、とはいえ、まだ親から餌をもらうんですけどね。そして、一週間くらいは巣に戻って寝ますが、自分で餌を探れる様になるといよいよ独立して南へ渡って行きます。親が巣を作り始めてから七週間。卵が生まれてからの六週間。ツバメはこうして成長していきます。

これから七月末までの六週間。みなさんは、毎日お家でご飯を食べてぐっすり眠ります。学校では、授業を受けて学力を身に付け、部活動でうまくなっていくきます。でも、その愛情も成長も日常ではなかなか実感しにくい。実感しにくい愛情や成長をツバメの成長から感じてくれないかなと思います。



玉龍の青春

（稲盛和夫氏の訃報に際して）

玉龍高等学校 秋元達也

全国ほとんどの学校で、年度当初に「学校要覧」という冊子が作成されます。その年度の学校における教育計画の全てを掲載した一冊です。

現存する本校の要覧で一番古いものは一九五七年度発行のもので、この年は校名が鹿児島県玉龍高等学校から現在の鹿児島玉龍高等学校に改められた年に当たります。全て縦書き、中には活字ではなく手書きの部分もあり、時代を感じさせます。

その中の年間行事予定表を見ると、当時の土曜日は休日ではなく毎週授業日だったのだとか、卒業式は二月中旬に実施されているとか、さらには五月の創立記念日に長距離走大会が実施されているとか、現在のスケジュールと比べて様々な違いが発見できる中、しかしそこに記されている行事名は、始業式であり入学式であり期末考査、体育祭、夏期特別授業、さらには「三年生アルバム委員選出」など、現在とほとんど変わらない言葉が並んでいることに気づきます。

この事實は、時代や生活様式こそ異なれ、当時の玉龍生も、なかなか伸びない学業成績に苦悩したり、現在と同様の学校行事に情熱を注いだりしながら学校生活を紡ぎ、自己の目標実現にひたすらに取り組んでいく、つまり、現在の玉龍生と何ひとつ変わらぬ「玉龍の青春」を過ごしていた証であると考えます。その玉龍の青春を経て、先輩方は大きな成長を果たされたわけです。

私が手にした最古の要覧の発行年から遡ると数年前、この玉龍山福昌寺跡の地で玉龍の一期生として高校生活を送られた稲盛和夫先輩の訃報が過日報じられました。戦後の日本のリーダーとして活躍された氏が踏みしめたのと「同じ」場所で学生生活を「今」送り、そして確実に氏と「変わらぬ」玉龍の青春を過ごしている現在の玉龍中・高の君たちには、ぜひとも氏の志をしつかりと理解し、受け継ぎ、未来の素晴らしい社会を創り上げる有為な人材として育ててもらいたいなあと切に願っています。頑張ろうね。



話のひろば

「大好きだよ」は魔法の言葉

生福小(市)

徳 永 寛 隆

小学五年生の担任をしていたとき、ある男の子(A君)を注意してしまう日が続いたことがあった。宿題はやってこ

ない、忘れ物ばかりする、友達とのトラブルが多いなど、正直、「またA君か」と感じていた。ある日、A君を注意していると、突然、「先生は、ほくのが嫌いなんですよっ！」と言って教室から飛び出してしまった。慌てて後を追いかけて、なんとか追いつき二人で話をするようになった。はじめ、A君は、口をとがらせ、私のことをすごい形相でにらみつけていた。そして、「他の子も悪いのに先生は、いつもほくのことばかり注意する。ほくのが嫌いだから、ほくばかり注意するんだ！」と私を

責め立ててきた。私としては、これまで他の子どもたちも同じように指導をしてきたつもりだったが、A君にとっては「自分ばかり」と思わせてしまったことに気付かされた。「先生は、A君のことが大好きだよ！その気持ちがA君に伝えられていなくてごめんさい。大好きだよっていう気持ちがこれからもっともつと伝わるように気を付けるからね。」とA君に言う

と、A君は、目を真っ赤にして涙を流し始めた。「大好きだよ」と伝えたことで、これまでA君との間にあった見えない心の壁が崩れてくれたのかなと思った。私は、A君と握手をしながら、A君のことが大好きだから、A君がもつと成長できるように応援していくことや、A君のことが大好きだから、直してほしいことは、注意もしていくことを伝えると、うなずいてくれた。

それから、A君だけではなくクラス全員にも「大好きだよ」と機会あるたびに伝えるように心掛けた。思っているだけでは気持ちは伝わらないし「大好きだよ」と伝えることで、自分自身の言動も変わってくるのを感じたからだ。

「大好きだよ」という言葉は、人間が持っている「認められたい」「愛されたい」という承認欲求を満たしてくれる魔法の言葉だと思っ。これからも「大好きだよ」と子どもたちに伝えていきたい。

地域の中で育つ

柏原小(北)

吉 國 耕 二

本校は、学校運営協議会を設立して三年目になる。「地域とともにある学校」を目指し、学校経営

についての意見や地域課題等について情報交換を行っている。現在、新型コロナウイルス感染症防止のため、多くの行事が中止となる中、地域の方々の意見を聞く貴重な機会となっている。その会の中で「地域の中で遊ぶ子供の姿を見かけなくなった。」という意見をよく聞く。確かにコロナ禍やゲーム機の普及等を考えると、友達と外で遊ぶ機会が少なくなってきたのかもしれない。以前、社会教育の仕事をしていた頃に「子供の遊びの重要性」についてよく言われていたことを思い出す。それは「地域に子供が集まれば、何をして遊ぶか知恵を出し、創造し、ルールを考え遊ぶ。子供同士のけんかやトラブルが起こると年上の子供が間に入り、自分たちで解決する。集団での遊びは小さな社会であり、その体験が成長する上でとても重要である。」といった内容だった。その当時はあまり気にかけていなかったが、家でゲームをしながら一人で遊ぶことを思うと「地域の中での集団による遊び」は、とても大切であり必要なことだと思う。また、地域行事に子供たちが参加することの大切さについても「地域行事に参加することで地域の大人との関わりが増えていき、子供に

とっては親以外の大人と話す機会が増え、成長する過程でよい影響を与える。また大人にとっても地域の子供を知ること、地域の教育力が高まる。」とよく聞かされたものだった。県も春・夏・秋の年三回「郷土(ふるさと)で学び・育む青少年運動」を設定し、地域ぐるみの青少年育成を推進している。

最近になり、コロナ禍で中止になっていた地域行事も少しずつだが、元の姿にもどりつつある。「子供は地域の宝」とよく言われるが、今の時代だからこそ特に大切な言葉だと思う。学校・家庭・地域が連携・協働しながら地域の中で子供の成長を支援できるように努めていきたい。



恩師二人

田中小(始伊)

満 田

忠

恩師。辞書を引くと「教え、慈しみを受けた恩義ある師」とある。これまで、教え導いてくださった

た恩義ある師は数えきれない。ただ、慈しみを受けたことを肌身で感じ、強く心に残る師は二人である。

やがて還暦を迎える私が昔を懐かしく思うとき、必ず恩師二人の顔を思い出す。お二人は、小学校の担任であるが、高校や大学の思い出の中にも、その二人から受けた影響が感じられるのだ。いろいろな場面で、事の大小にかかわらず判断するときの基準のようなものを、二人から受けているような気がする。また、ある場面では、二人をモチーフに振る舞っている自分がある。恩師二人について、少し触れてみたい。

一人は小学校四・五年生時の担任。真面目でシャイで、とても字がきれいな芸術家肌の教師だった。師の下宿には、カラヤンのポスターが貼ってあり、クラシック音楽が流れていた。高校生になったとき、地元のレコード店でカラヤンを買って、よくわからぬまま何度も聴いた。今でも私の広くて浅い趣味の一つである。師は、新規採用職員として赴任され、当時は独身であったため、休日もよく一緒に過ごした。ある時、私が友だちに不公平な態度をとったことを深く嘆かれ、涙を流しながら「残念だ!」というよ

うなことを言われたことがあった。以来、師を二度と裏切るまいと心に決め、そのように振舞って来たつもりである。

もう一人は、六年生時の担任である。残念ながら早逝され、もうお会いできないのが残念であるが、とにかく厳しい師であった。愛用の「知恵の棒」という竹の節が瘤のようになった棒は、指示棒であり、杖であり、愛の鞭だった。破天荒な師であったが、新種の気鋭に富み、人を引き付ける力があつた。今ではどの学校でもタイムカプセルを卒業記念に残しているが、当時は大変珍しかった。建設業の保護者を総動員して五右衛門風呂の釜をつなぎ合わせたような大きなカプセルを校庭に埋めさせた。そして、二十年后に開封すると宣言し、私に段取りを託された。コツコツと知恵の棒が廊下に響くと、恐怖も感じたが、それ以上には何があるのだろうか」と当時は心躍らせた。

恩師二人に近づきたいと願いつけた教職生活であったが、さて、そのお二人は今の私をどう評価してくださるだろうか。



読書案内



■池上 彰 監修

なぜ僕らは働くのか

草牟田小(市) 大 重 満 明

本書はジャーナリストの池上彰氏の監修のもと、二百三十人を超える人々の協力により書かれたものである。協力者は小・中・高校生、大学生、各種の職業人など多様である。「なぜ僕らは働くのか」、「人は何の目的で職業に就くのか」、その答えは人それぞれであり、また同じ人物でも若い時と年齢を重ねた時では異なる答えにたどり着くのかも知れない。

本書「あとがき」には次のような記述がある。

「この本は小学校高学年の人や、中学生、高校生に向けて作られたものです。しかし、大学生

や、すでに社会に出た人にも読んで欲しいと思っています。」

本書は全体の構成として六つの章に分かれているが、各章の始めは漫画で導入し、文章での解説を加え、最後に協力者諸氏の考え方を参考にするとという読みやすい形式になっている。そのため小学校高学年の児童にも十分理解できると思われる。ぜひ小・中・高校生に勧めたい。

なお、前述の「あとがき」にもあるとおり社会人こそ本書を読むべきではないかと強く思う。

我々が働く理由、職業に就く目的として最初に思い浮かぶことは経済的な自立や安定、すなわち「収入を得るため」ということであろう。

しかし、それだけであろうはずはなく、社会的分業による社会貢献や、自らの個性の伸長、自己実現など、経済的理由以外の目的も挙げられる。万人が納得する正解はないのであるが、本書ではそのことを分かりやすく説明する。

我々教職に就いた者も時に仕事に疲れ、悩み、苦しむこともある。経験の浅い教員だけでなく円熟期に入った教員も、自らの体力や精神力の衰えから思うように職務に従事できない状況もあるのではなからうか。本書は読者各々の経験や状況と重ねながら読むことができ、教職の果たすべき社会的役割も思い出させてくれる。

読者感想に四五歳の会社員が寄せた「時折泣きながら読みました」という言葉が心にしみた。

G a k k e n 一六五〇円

金十丸、奄美の英雄伝説

市比野小(北)長崎 克則

「金十丸(かなとまる)」という船は鹿児島に住む私たちが是非心にとめておくべき船舶の一つであろう。

昭和十七年に建造。その船体の美しさから「海の女王」と呼ばれ、人々に親しまれていたという。ここではこの金十丸に関するいくつかの伝説から三つほど紹介させていただきたい。

伝説の一つ目。昭和十九年八月二十一日、トカラ列島沖を航海していた金十丸は、米軍の潜水艦ボーフィンの追撃を受けるが、船長の勇敢な操船と金十丸のスピードで逃げ切ることに成功。有名な対馬丸の悲劇はこの翌日、八月二十二日に発生している。金十丸は、当時の前村与一船長の知恵と勇氣、船体の素晴らしさで、無傷で終戦を迎えることとなる。

伝説の二つ目。昭和二十三年、米軍統治下の奄美群島からすでに新しい教育制度がスタートしていた本土へ二人の教師が密航した。教科書などの「新しい教育」を持ち帰ることに成功したこの事件は「金十丸教科書密航事件」として語り継がれている。

伝説の三つ目。昭和二十七年には、米軍によって接収されていた金十丸が十一名の若者によって当時の国境線を越えて鹿児島まで盗み出される事件が起こる。これが「金十丸奪取事件」

である。

本著は、ノン・フィクションでありながらまるで物語のようにテンポよく金十丸やゆかりのある人々の活躍が語られている。当然のことかもしれないが、その基盤には、著者、前橋松造さんの綿密な取材や調査がある。

最後に、戦時中、奄美やトカラ列島付近の海域では戦火により四〇数隻の商船が沈没し、多くの犠牲者が出ているという事実は忘れられることはできない。

南方新社 二三〇〇円＋税

■安藤広大 著

リーダーの仮面

南永小(始伊)宮崎 みどり

校長になって、三年目。年を追うごとに、学校経営の難しさをひしひしと痛感する。コロナ禍で、なかなか先輩方と話す機会もなく、悩みを相談する時間も十分に取れない。そこで、自己の経営の在り方を見直し、今後のヒントにしようとして本書を手にした。

この本は、識学という意識構造学をベースにした組織マネジメントを解説したビジネス書で、昨年、一般企業約二千社に導入され効果を上げているようだ。「経営」という面では、学校経営も同じで、何かしら気付きを得られるも

のだと考える。リーダーから見える風景は多くあるが、ここでは見るべき五つの視点を挙げてみる。

- 一 ルール…ルールを言語化して守らせる
- 二 位置…対等でなく上の視点から要求する
- 三 利益…集団の利益が個人の利益に繋がる
- 四 結果…プロセスを評価せず、結果を見る
- 五 成長…成長の場を用意する

『ルール』があることで、迷わず業務に邁進できる。ルールを守らせるポイントには、「主語を曖昧にしない」「誰が何をいつまでにするか」を明確にすることである。『立ち位置』をはっきりさせることは、責任の所在が明確になり、「お願い」ではなく「言い切り口調」で指示を出すという点で大切である。『組織の利益』を最大化させることは、一人一人のやりがいに繋がる。

『結果』だけを評価することは、途中のプロセスを自分なりに工夫し、結果業務改善になる。『成長』できる環境を整えることで、個々が切磋琢磨し、良きライバルチームができ、全体の成長に繋がる。

「マネジメントは、リーダーの言動」で全て決まる。重みのある、もつとも言葉である。個人的感情を排し、リーダーとしての仮面をかぶること、「未来」へ向け、組織の最大化と職員成長のために見るべき視点を焦点化することなど参考となった。学校経営にふと疑問を覚えたとき、何らかのヒントが得られる一冊だと思う。

ダイヤモンド社 一六五〇円

今回、趣味・文芸のテーマで投稿することが決まってから、改めて自分の趣味は何だろうと自問してみました。結果、よくよく考えてみると、自分には他人様に紹介できるようなこれといった趣味がないことに気がつきました。

そこで、もう一つのお題である文芸について書こうと思ったのですが、こちらも全く素養がなく、読んでくださる先生方には、誠に申し訳ありませんが、素人による評論・感想に近い文章になってしまいますことをお許しただければと思います。

さて、文芸といいますが、非常にジャンルが多く、辞書的には「言語によって表現される芸術の総称。」とされています。

文芸のジャンルの例をいくつか挙げてみますと、文学（小説）、エッセイ、詩歌、短歌・俳句、戯曲などがあります。

私にとつては、どのジャンルもあまり馴染みがなく、語ることが難しいものばかりです。

そのような中、芸能人の皆さんが俳句にチャレンジ（作句）して、そのできばえを競い、有名な先生に手直しや講評をもらうテレビ番組を見る機会がありました。五・七・五の限られた文字数に「季語」を入れて自然や風景を表現しなければならぬ俳句のルールに、難しさと奥の深さを感じると同時に、面白さを再認識することでした。

俳句と似た文芸に「川柳」があります。こちらは俳句とは異なり、「季語」を用いる決まり

がありません。俳句と同じように五・七・五の文字数ではありますが、季語を気にせず、世相に対する風刺や作者の素直な思いを表現することができると、私は、どちらかといえば、俳句よりも川柳に親しみやすさを感じています。

そこで、ここからは、毎年実施されている「第一生命サラリーマン川柳コンクール」のここ数年の作品について、若干の私的考察を述べたいと思います。特に、コロナ禍を挟んで、人々の「働き方」や「生活様式」の変化に対して、私たちの意識がどのように変化しているかに注目してみました。

「川柳」に見るコロナ禍の影響

名瀬中(大) 木場 敏朗

まず、数年後には新型コロナウイルス感染症が出現し、世界中で猛威を振るうなどとは全く思ってもいなかった平成二十六年の作品に「がんばれば がんばったほど 仕事ふえ」という句があります。当時は、まだ「働き方改革」という言葉が定着する前で、働く人たちにとつては、時間を気にせずいくらでも働けた（働かされた）頃の一句です。

コロナ禍が始まる前の平成二十九年には「効率化 進めて気づく 俺が無駄」

「人減らし 定時であがれ 結果出せ」等の作品が登場します。働き方改革のかけ声が

盛んに叫ばれるようになり、私自身を振り返ってみても、業務の効率化のために、何をどうすればよいかを模索していた頃でした。しかし、まだ、コロナ禍前であり、職場での上司や同僚とのコミュニケーション、子どもたちとの近い距離感での触れ合いが遠慮なくできていたため、あまりストレスを溜めることなく仕事ができていたことを懐かしく思い出します。

「リモートで便利な言葉「聞こえません！」」

感染症の拡大防止対策で様々な研修会や会議がリモートで実施されるようになりました。

移動時間や学校に配当されている旅費のことを考えると、リモート形式での会議や研修会の実施も良い面があると感じつつ、やはり、対面でないことによる不安を感じてしまうのが「アナログ世代」の悲しい特性なのかもしれません。

「働き方改革」や「新しい生活様式」が、私たちの生活の在り方や仕事の在り方へ様々な変化をもたらしている今、私自身、次の一句を反面教師として、これからの業務への向き合い方の参考にしていきたいと思えます。

「無理をさせ 無理を言おう」

与えられたテーマの文章としては、いささか無理矢理な展開になってしまいました。最期までお読みいただきありがとうございました。





池田学で「神舞」の伝承活動

池田小(隅) 石 踊 晴 元

一 平家落人と関係深い池田小学校区

池田小学校区は、錦江町の東部高地に位置し、神之川上流に散在する十二の自治会から構成されている純農村地域である。

錦江町には、田代(大原)、大根占、池田(半下石、毛下、段)、宿利原(笑喜、落河、大尾)など、平家落人の集落と伝えられているところ^はが相当数あると言われている。

半下石集落は、壇ノ浦より落ちのびた一族^はが、本集落に入り、ここを潜居の地として、敗走千里の旅装を解くことになったと伝えられている。

毛下集落は、半下石より分かれた一族が武装を解き、頭髮を落として百姓姿に変装し、世をしのぶことになったという故事にちなみ、この地を毛下と称し、姓を毛下と名乗ったと伝えられている。

段集落は、半下石より北方四キロの地点にあり、段の姓を称した。段は、壇ノ浦の「壇」の音を取ったと伝えられている。

二 鳥津家と関係深い池田旗山神社

川南自治会には、旗山神社が鎮座している。この社は古くから旗山大明神と呼ばれていたが、鳥津氏がこの山中の竹を戦いの旗竿にしたことから、「旗山」と呼ばれるようになったと伝えられている。

三 伝統芸能「神舞」

池田旗山に伝わる神舞は、三百年ほど前から存在していたと推測され、舞い手自ら口上を述べながら舞うなど、風土や文化を背景に、独自に進化しながら継承されてきた。現在は十種類の舞が継承されている。しかし、平成二十五年を最後に、神舞は奉納されなくなった。継承者の高齢化や人口減による担い手不足、社会の多様化やニーズの変化など、様々な要因が考えられる。

四 「池田学」で神舞の継承活動

令和三年度、ふるさと池田に学び、池田のよさを知る学習活動を「池田学」と銘打ち、神舞の継承活動に取り組むことにした。

令和三年七月、「池田小学校神舞継承活動」について保存会の方々と会合を開き、協力と指導の依頼を行った。

同年十月の全校朝会で、保存会による神舞を演舞していただき、神舞について児童の興味・関心を高めさせた。その後、五・六年生は、演舞班五名、調査班六名に分かれ、学習発表会に向けて準備を進めた。

演舞班は、保存会の方の指導とVTRを視聴して細かい動きに注意しながら完成度を上げる努力をした。調査班は、舞で使う「ツノ

ブキ」の作成と神舞の歴史や旗山神社について調査した。

十一月の発表会当日は、約七十名の来場者を前に、演舞班の五名は保存会の太鼓と篠笛の音に合わせ「鬼神舞」を力強く演舞した。調査班は、パソコン

を駆使して堂々と発表した。多くの来場者や年配者から「生きていくうちに二度と見ることはないと思っていた。」等、喜びの声を多く聴くことができた。

令和四年度の学習発表会では、三年生以上の九名が神舞を演舞した。昨年舞い手だった一人は単独で「多力鬼神舞」を演舞し、他の八名は各学級ごとに「鬼神舞」を演舞した。

本年度も学習発表会前の一か月間、週に一回、保存会の方の御指導を仰ぎ、練習に取り組んできた。

後日、保存会の方から、篠笛や太鼓等の「楽」も伝えていけたらと要望があった。

今後も、神舞保存会と連携を図り、子供たちの神舞が地域での継承に繋がるきっかけになってほしいと願っている。



専門部だより

〈総務部〉

一 各地区校長会との連携

例年、夏季休業中を利用して各地区校長会との連絡会を実施している。本年度は、鹿児島市、北薩、始良・伊佐、熊毛の四地区で開催した。

連絡会では、学校における業務改善の進捗状況、中学校における部活動指導の在り方、定年引き上げに係る管理職の異動等について意見交換がなされた。今後は、県教委からの情報共有に努めていくことや学校間の連携強化を更に図っていくことを確認した。

二 教育機関・諸団体との連携

県教育委員会との連絡会及び県退職校長会との連絡会は、感染症対策のため中止となった。

県PTA連合会との連絡会は、予定どおり七月十六日に開催され、コロナ禍における家庭教育支援の現状、不登校・いじめ・貧困の問題、高等学校におけるタブレット端末の整備状況、中学校における部活動の地域移行等について意見交換がなされた。また、PTAの任意加入に係る県PTA連合会の基本的な考え方やPTA活動に工夫・改善を図っている単位PTAの実践事例等の情報を得ることもできた。県PTA連合会からは、子供たちの健やかな成長を願い、学校とPTAの連携をこれまで以上に深めていくことに期待が寄せられた。

三 学校予算に関する要望活動

各地区校長会・県立学校からの要望を集約した要望書を作成し、十月十八日、県教育委員会に対して学校予算に関する要望を行った。

教職員の配置改善の面では、小・中学校における教員業務支援員の配置拡充、高等学校における教科「情報」の専門教諭の配置、特別支援学校における計画的な正規職員への移行等について要望した。

県教育委員会からは、令和五年度の国の概算要求等を注視しながら、必要な財源確保に努めること、情報科の教員採用を進め、専門的な人材の確保に努めること、児童生徒の推移等を踏まえながら、必要な教員の採用に努めていくことなどの回答をいただいた。

その他、管理職手当をはじめ、諸手当の増額について要望したところ、これまでも国や各県の状況等を参考にしながら見直しを行ってきており、今後も国の教員給与の見直しの動向等を注視していくとのことであった。

四 その他の各種会合の開催

予定していた総会、常任委員会、総務部会等、多くの会合が書面での開催となった。

日本教育会全国教育大会が、十月二十九日、オンライン方式を取り入れたハイブリッド型で本県で開催された。県内外から四四一人の参加があり、実践発表や記念講演等を基に、記憶に残る充実した大会となった。

〈研究部〉

一 鹿児島県小・中学校長研究大会紙上開催

〈大会主題〉

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

令和四年十一月十一日開催予定であった研究大会は、コロナウイルス感染症への対応のため、三度目の紙上開催となった。

研究部では、令和二年度から研究大会の在り方について検討を重ねてきており、コロナ感染対応だけでなく、短期間でありながらも

大会主題に沿った中身のある研究大会となるよう会場や時間設定を工夫した一日開催を立案した。

具体的には、移動に費やす時間を短縮するため、参加者は全体会開始時から、分科会場に着席した上で、本会場とオンラインで結び、リモート視聴とした。午後からの分科会発表については、実践発表が学校経営力の向上に欠かせないという観点から、従前に実施された流れと同程度の時間を確保した。

しかしながら、大会開催の可否を検討していた八月には記録的な新規感染者数が報告されるなどしたため、九月の連合校長会役員会で本年度も紙上開催が決定された。予定していた津曲学園理事長の津曲貞利氏の講演等、校長が一堂に会し、議論しながら学校経営を学ぶ機会を得られなかったことは残念であるが、大会要録に収録された研究論文が経営のヒントとなることを願う。

二 九州・全国の研究大会

令和三年度の九州・全国の研究大会は、大会により判断が分かれ、対面での開催、オンライン開催、オンラインと一部対面を組み合わせたハイブリッドでの開催と様々であった。

- 九州地区小学校長協議会研究大会長崎大会
小野小 今村 靖 校長（第五分科会）
黒木小 平山 淳郎 校長（第八分科会）
波野小 有馬 賢一 校長（第九分科会）
- 全九州中学校長会研究大会福岡大会
喜界中 藤野 義久 校長（第四分科会）
東串良中 西田 昌史 校長（第六分科会）
- 全国連合小学校長会研究協議会島根大会
発表なし
- 全日本中学校長会研究協議会北海道大会
発表なし

令和五年度は、全連小は東京都、九小協は佐賀県、全日中及び全九中は大分県が開催県の予定である。

末筆ではあるが、令和四年度の県内外の研究論文執筆・発表及び分科会運営に御協力いただいた校長先生方にお礼を申し上げたい。

〈人事給与部〉

一 人事・給与及び人事評価制度に関する調査

〔令和四年度の人事・給与に関する意見と令和五年度への要望〕・「教職員の人事評価制度に関する意見・要望」について、全校長にアンケート調査を実施し、その結果をもとに、県教育委員会への要望書を作成した。

二 県教育委員会への要望活動

〔県教育委員会への要望説明の会〕〔参加者：県教育委員会（教育長他十名）、県連合校長協会（会長他六名）〕を、十月十八日に、県庁で実施し、次の点を主に要望した。

(一) 人事異動について

ア 校長が、より主体的に学校経営を推進できるように、人事異動に関する校長の具申を十分に尊重する。

イ 定年引き上げに伴い、全ての教職員が意欲をもって勤務できるよう検討する。

ウ 業務改善に係る人的配置について、今後もより一層推進する。

エ 教員の配置については、未配置とならないように努める。

(二) 給与について

ア 教職に魅力を感じられるよう教員の給与の維持・改善に努める。

イ 管理職の給与や手当等については、職責に見合う処遇の改善を図る。

県教育委員会からは、必要な教職員の確保や配置に努めること、新たな制度については、

丁寧の説明していくとの回答を受けた。

〈広報部〉

令和四年度も会員の皆様の御協力により、当初の計画に基づいた活動が円滑に進められたことに感謝いたします。

一 月刊「鹿児島島の教育」

「随想」は、県下各地において様々な分野で活躍しておられる方々に玉稿をいただくことができた。

教育職以外のお考えや思いに触れ、人間としての幅を広げることができた。また、会員の提言や実践事例、各種話題等はそれぞれ特色があり、学校経営に生かすとともに、職員・児童生徒への話題としても活用することができた。

二 特集号「鹿児島島の教育」第六十八号

特別寄稿には、センチラス天文館運営会社取締役の本田まゆみ氏に、ビル開発に携わる心構えや組織をリードする上で大切にしていることなどを経験に照らし論述いただき、鹿児島大学教育学部の高谷哲也准教授には、「教育学を学ぶことでみえる世界」と題し、自身の経験を基に理不尽な指導を問い、「本場の教育」を追究していく要件を明らかにした上で、日々の営みの分析の必要性について示唆をいただいた。その他、多くの会員の先生方に玉稿をいただき掲載できた。

三 「師の道」五〇号

先輩校長の歩いてこられた教職への熱い思いに感動し、敬意を表するとともに、少しでも近づけるよう決意を新たにしたい。

四 「講演録」発行

十二月に実施された中央大学人文科学研究所の高橋聡美氏の講演を講演録として、発行することができた。

編集

後記



不確かな時代を幸せに生き抜くための唯一にして、最強の武器になりうるのが、「自己肯定感」だと主張する現役の小学校教師がいます。彼の著書によるとさらに自己肯定感には「達成力」「仲間力」「感情力」の三つから身に付けられると続きます。「達成力」は物事を粘り強く続けて目標を達成する力。今年度の「月刊 鹿児島島の教育」にも何かを成し遂げたエピソードやそこに至るまでの苦労や努力、例え失敗に終わったとしてもそこから学んだことなどが数々掲載されました。「仲間力」は周りの人と協力する力。これについてもほっこりするようないくつかの挿話が掲載されています。「感情力」は自分の気持ちをコントロールする力のこと。校長先生方から貴重な体験談等を寄稿いただき読者としての感情を揺さぶられました。

ありのままの自分に満足し、価値ある存在として受け入れる力が自己肯定感であるとすれば、「月刊 鹿児島島の教育」を毎月読むことで、それを高められるような気がするのには私だけではないでしょう。特に校長としてなるとなく不安や怯えを感じるような状況にあっても、なかなか行動に移せなかったり決断できなかつたりするのは、自己肯定感の低さが影響している場合が多いのです。そんな時に全国的にも珍しいこの機関紙は、意思決定や最初の一步を踏み出すエネルギーを与えてくれます。

今年度も貴重な玉稿を御寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

長崎伸一（南中学校）